

「集める」学問としての考古学

鹿児島国際大学国際文化学部 教授

中園 聡 (なかぞの さとる)



Profile — 中園 聡

1992年、九州大学大学院文学研究科博士課程史学（考古学）中退。博士（文学）。九州大学文学部助手、講師、鹿児島国際大学国際文化学部助教授を経て、2003年より現職。専門は考古学、博物館学。著書は『九州弥生文化の特質』（九州大学出版会）、『認知考古学とは何か』（共編著、青木書店）、『稲作伝来』（共著、岩波書店）など。

集める人、集める考古学

考古学をめぐる「集める心」に関して、次の二つをとりあげたい。一つめは、考古学的に復元できる現象としてのそれである。700万年にわたる人類の活動の痕跡を研究の素材とするのが考古学であり、行為の起源を知ったり、その歴史の変遷を証拠に基づきながら考察したりできるのは強みといえる。モノを「集める」ということの検討に資すると思われる考古学的な事例について、認知考古学の観点も多少織り交ぜながら、紹介と問題提起をしてみたい。二つめは、考古学と考古学者自身について。調査研究の基礎に発掘などの収集活動を伴い、しばしば膨大な資料を蓄積する考古学は、「集める学問」の最たる例かもしれない。考古学の学問的・社会的性質と絡むモノの収集・蓄積にはどのような意味があるのだろうか。

集める縄文人・集める弥生人

縄文時代の貝塚（BC4000～1000）をご存知の方も多かろう。人が食べた貝殻などの集積で、貝殻のほか獣魚骨、壊れた土器など、多様で膨大な廃棄物が出土する。この考古学者にとっての「宝の山」は、「ゴミの山」ともいえる。貝塚は通常、集落に付帯し、主要類型である馬蹄形に集落を囲むものなどは、考えてみれば不衛生で、心地良い生活はできないようにも思える。

ところが、考古学者だけでなく縄文人も貝塚好きだったふしがある。身のない貝殻をわざわざ採取して持ち込んだり、粉碎して貝塚に定期

的にかぶせたりした例が指摘されており、貝塚形成・装飾資材とみられる（村田、2002）。貝塚からは装身具も出土し、墓が見つかることもあるため、単なるゴミ捨て場ではなく、またゴミ概念も現代とは異なるであろう。弥生時代に集落の周囲に濠と土手をめぐらせた環濠集落があるが、防御施設というより集落を荘厳化する装置であり、集落の伝統や格式を主張し誇示したとみられる（中園、2004）。縄文貝塚も集落の豊かさや伝統を示す役割があったろう。いずれにせよ、縄文人にとって貝塚は集落の大事な構成要素だったと推定され、集積物や集積行為に興味があったことは確実である。貝塚は形成の初期はともかく、長期の営みで、貝塚自体が廃棄行為と貝塚形成行為をアフォードするようになった意図的／半意図的構築物といえる。

縄文時代には貝塚以外にもさまざまなモノを集めた行為の痕跡が随所にみられる。果ては大きな穴を掘って、掘り起こしてきた100体以上もの人骨を集積した例さえある。以上の例は、土中の貯蔵穴に食糧のドングリを蓄えるという縄文人の素朴な行為とは異質な面をもつ。単に集めるというより、しばしば生存に無関係である象徴的器物や、ある種の器物について、必要量を大きく超えて「集める」、つまり「集めすぎる」ことが、縄文人にも私たち現代人にも共通する特徴的な行為なのかもしれない。

象徴性を帯びた物資を搬入する遠隔地交渉（long-distance interaction）が特に顕著になるのは、弥生時代（BC1000～AD250）からである。

それに先立つ縄文時代には糸魚川産のヒスイなど、列島規模での長距離移動例がみられる。しかし、弥生時代は明らかな異文化と交渉が頻繁に行われ始めた点で縄文時代とは異なる。

弥生人は九州から海を越えて大陸や沖縄諸島に乗り出し、多数の象徴的な財を入手した。北部九州でBC 1世紀に中国の漢王朝と外交関係をもった王は、漢の皇帝からの下賜品を含む30面以上もの中国鏡、ガラス璧、ガラス勾玉、銅矛などとともに埋葬された。それらを頂点として、副葬品の種類・サイズ・数などで5段階の明確な身分階層を表示するシステムがあり、王は集めた威信財を傘下の地域首長に、格に応じて再分配した（中園，2004）。沖縄諸島産の大型巻貝製腕輪も、弥生人が海を渡って入手していた。沖縄では原材料の貝を弥生人のためにストックした集積遺構も見つかる。

苦勞して集めたモノには意味や価値が付与され、遠隔地や異界とのつながりを示す、よすがともなる。首長が自らの権威の維持・拡大のために、「異界」（常人にはアクセス困難な、地理的・心理的遠隔地）との交渉力を示した物証がモノということになる。こうした「異界交渉型」遠隔地交渉は古代国家成立以前の首長制社会で、世界的に広くみられる（Matsumoto, 2011; Nakazono, 2011）。そのほか、弥生時代には銅剣や銅矛などの大量埋納遺構なども発見されている。生活物資の収集とは別のモノ集めの例は、弥生時代には枚挙にいとまがないのである。

集める人の起源

伝統的な用語で大まかにいえば、猿人、原人、旧人、新人（ホモ・サピエンス）の順に、前後重複しながら交替していった。形質だけでなく、遺物、遺跡に残された痕跡から、それぞれに固有の行動上の特性の痕跡から、「心の進化」がうかがえる。では、ここで問題にする種類の「集める」行為は、いつから始まったのか。

私たちホモ・サピエンスのモノを集める行動はきわだっている。しかし、その初期はそうした行動の痕跡がかんばしくない。10～7万年前のアフリカで、線刻を施した黄土や数十個の

貝製ビーズが洞窟に持ち込まれた例、顔料を貝殻容器に入れた例、特定植物の葉のみを集めて敷物にした例などが見つかっており、「集める」能力があった証拠といえる。しかし、「集めすぎ」というにはまだ隔たりが大きい。特定のモノを集めたり集めすぎたりする行為は、ホモ・サピエンス特有の「心」に立脚するようだが、もともとポテンシャルはあっても、その開花までにはかなり時間がかかったとみられる。

先に出現していた別種のネアンデルタールも、その末期にホモ・サピエンスと併存した時期には、多少とも「人間らしい」行動をしたことがうかがえ、ある意味で両者は大差ないほどであった。特定のモノを集めたり集めすぎたりする行為は、ホモ・サピエンスにとっても、その後期、つまり物質文化の多様性の顕著化や芸術が明瞭になる約5万年前以降をまたなければならなかったらしい。また、そうした行為の痕跡が誰の目にも明らかになるのは、新石器時代（縄文時代相当）になってしばらくしてからである。そうした、いくつかの画期をまつ必要があったようである。

以上をまとめると、初期のホモ・サピエンスでは非常に不明瞭で、明らかな例は後期旧石器時代に下り、そして1万年前を少し遡るころの「新石器革命」と呼ばれる農耕・牧畜、土器などの出現期を経て、定住化が進み人口密度が増えた数千年前ごろから「集める」行為が本格化する、ということになる。それらを科学的にどう説明するかは大きな問題である。少なくとも5万年前以降の変化については、脳神経系の変化などではなく、人口集中や定住などの住環境の変化や、それに付随する文化的情報の社会での伝達・蓄積の密度、人々の間や社会の間での競争関係といった文化的要因が大きく関係していると思われる。心・物質文化・社会の共進化とでもいうべきそのあたりのことについて、皆さんはどう考えられるだろうか。

集める考古学

考古学の調査研究の第一段階は、犯罪捜査と似ている。過去の個々人が残した証拠を現場で

記録し、回収し、分析することで人間行動を復元するからである。化石を発掘する古生物学とも方法的に近いものがある。遺跡を掘り、顔を出した遺物の三次元座標を一つひとつ記録し、丹念に実測図を描いたり写真を撮ったりする(写真1)。遺跡を一つ発掘すると、土器片だけで数万点、数十万点出土することはざらである。先端的な測量機器や三次元計測機器も利用すれば多少楽になるとはいえ、遺跡から遺物を回収する労力は半端ではない。そして遺物を持ち帰り、洗浄し、遺跡名や地点などを破片に書き込み、接合・復元する。こうした骨の折れる基礎作業が延々と続く。そのうえ調査報告書の刊行のため、遺物の正確な実測図とそのトレース図の作成、文章の記載など多大な労力を要する。

研究めいてくるのは基礎作業を終えてからである。時間的・機能的に遺物を分類・整序し、さまざまな分析・検討を経て、ようやく過去の出来事が見えてくる。多くの遺跡のそうしたデータを集め、比較検討し……やっとな歴史叙述なり法則性の抽出なり、より高次のめざすべきところに行き着く。時間を扱う学問として近い存在が文献史学(狭義の歴史学)だが、文献記録から出発する文献史学に比べ、モノに過去を語らせようとする考古学は、基礎作業にいかにも多大なエネルギーを費やすことか。

それでもこのアプローチは必要である。人類史上、時間の99.9パーセント以上は文字のない先史時代である。そこには認知進化、物質文化の複雑化とそのカテゴリー化、物質文化や景観への意味や象徴性の付与の問題、発明がどのようなメカニズムで模倣され社会に蓄積・継承されるのかなど、さまざまな問題の証拠が時間の深みとともに存在している。また、宗教、ジェンダー、民族・エスニシティ、戦争、国家、差別、健康、環境、人口問題……、将来にわたり課題となる事柄の証拠も存在する。なぜ出現し、存在するのか。メカニズムを解明し問題解決に寄与するには、それらが起源する先史時代までどうしても遡る必要がある。加えて、文字がある時代でも記録されない事柄は多い。そう考えると、ますます考古学は過去の個々人の



写真1 基礎作業としての発掘調査

「遺留品」を悉皆的に扱い続けるべきである。——私流の考古学の方法と意義の概説みたいになっちゃったが、考古学が異常なほどモノを収集し執着する「正当な」理由がここにある。

集めた資料やデータは文化財として保管しなければならない。それは、将来にわたって研究に必要なからであり、国民/人類共有の財産として、公衆の学習などの利用に供し、かつ完好的な状態で後世に伝えるためでもある。博物館、埋蔵文化財センター、教育委員会などには膨大な資料が集積・蓄積されているが、増え続ける資料に途方に暮れているところも多い。これは「集める学問」としての考古学の特徴でもあるし、宿命的な悩みでもある。

集める考古学者

考古学者には二つの類型があると言われる。まず、大学で専門教育を受ける前から野山で土器片や石器を拾い集めた経験をもち、趣味が高じて専門家になるタイプ。もう一つが、そうした経験なしに大学の専門教育を受けて育つタイプである。前者は鑑識眼に優れ、遺跡を見つける鼻が利くが理論に弱く、後者は勘は鈍いが論理的だなどという、まことしやかな話もある。かく言う私も中学・高校時代に土器や石器を採集した部類に属する。黒く透き通った美しい黒曜岩製石鏃(矢じり)を手にした感動や、旧石器時代のナイフ形石器を拾って「これに触れたのは2万年前の人と僕だけだ」と思ったこと、土器片を段ボール箱一杯拾って「歴史の謎を解き明かそう」と決意したことなどが懐かしく思い出される¹。そのおかげかどうかは不明だが、

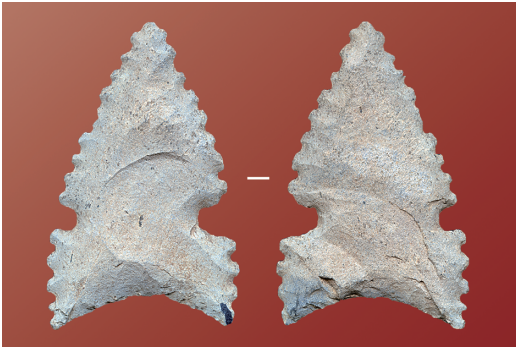


写真2 アマチュア研究者が偶然採集した縄文時代の石もり（約4000年前）

土器の観察や同定は得意である。

同様に、昆虫、植物、化石、岩石などの採集からそれぞれの専門に進む人もいる。これら「集める学問」では、アマチュアの活動もみられ、時に大発見もある（写真2）。ほとんどの学問が資料、文献、データ等何がしかの収集を伴うけれども、少年・少女や大人までもが、やむにやまれぬ衝動に駆りたてられて収集し、のめり込むのは多少とも性質が異なるだろう。「集める学問」の極端な例が考古学である。

さきに、考古学が尋常でないほどモノにこだわり、収集・保管することの「正当な」理由を述べておいた。他に挙げうる理由に、上記のような「やむにやまれぬ衝動」があると思う。ある物を通常の生活に必要なほど、むしろ生活の害となるほど収集する人は、「集める学問」に限らず多く存在する。本来、モノはモノでしかないが、私たちはモノに多様な象徴的意味や価値を付与して生きている。人がモノを集める行為は、鳥が細枝を集めて巣を作るのとは違って、未来を考える能力と象徴的意味や価値を付与する能力に加え、ホモ・サピエンスの心・物質文化・社会の共進化の歴史の延長にある。

また、人はモノを見るとしばしば、「金持ちのものだ」「○○族が作ったに違いない」など、その背後に人や集団を見出す。同様に、考古学者が遺物に触れる場合も、モノを通じて過去の個人や集団を想像するし、理論的には短絡的だと知っていても、個人や集団と結びつけたいという衝動に駆られる。モノを通して「心の理論」が働いているといえるかもしれない。そして、

考古学者は弥生人が遠隔地交渉で入手した物資にそうしたように、自らの時間・空間から離れたところから来た遺物に意味を見出し、抑えがたい魅力を感じがちである。もちろん、それは研究遂行の原動力となりえるが。考古学者のそのような反応が、モノに対するホモ・サピエンスの止みがたい性質に由来するなら、将来の考古学者も逃れられないであろう。

石に病みつきたった江戸後期の木内石亭は、長年にわたり全国の石を収集して『雲根志』を著した。石器を人工品と見抜いたこの奇特定の趣味人は、後世、日本考古学史に名を残すことになった。やむにやまれぬ衝動に突き動かされた収集は、時として無駄に終わらないことがある。まして、学問としての体をなした「集める学問」としての考古学は、価値あるものを生み出すと信じる。心理学と同じく人を対象とするこの遠くて近い学問を見守っていただきたい²。

1 これは古き良き時代の話であって、教育委員会や地権者に無断でみだりに採集しないようお願いしたい。

2 本稿の一部は、JSPS 科研費・基盤研究（B）（26284124）の助成による。

文献

- Matsumoto, N. (2011) The cognitive foundation of long-distance interaction and its relation to social contexts. In N. Matsumoto, H. Bessho & M. Tomii (Eds.) *Coexistence and cultural transmission in East Asia*. California: Left Coast Press.
- 村田六郎太 (2002) 鹿児島県垂水市柘原貝塚貝層断面の観察：博物館からのアプローチ。人類学研究, 13, 67-74.
- 中國聡 (2004) 『九州弥生文化の特質』九州大学出版会
- Nakazono, S. (2011) The role of long-distance interaction in sociocultural changes in the Yayoi period, Japan. In N. Matsumoto, H. Bessho & M. Tomii (Eds.) *Coexistence and cultural transmission in East Asia*. California: Left Coast Press.